

## 「ニコマコス倫理学（上・下）」

アリストテレス(著)

高田三郎(訳)

岩波文庫 1971年11月16日刊

本書は2300年以上前、すなわち、わが国がまだ縄文時代にあった時期に書かれたものである。もちろん、同時代の中国でも戦国時代を反映して諸子百家の学術思想が繚乱しており、ギリシャだけが当時の先進国であったわけではない。しかし重要なことは、アリストテレスの議論の現代性にある。これはアリストテレスに先見の明があったというだけではなく、現代社会の原理がいかに関りし時代政治・経済・社会制度やその思想に基礎を置いているかということの証であるとも考えられる。例えば、われわれが現在受け入れている民主政治、共和制、司法制度、個人と国家の関係についての考え方はギリシャ時代に生まれたものであることはプラトンやアリストテレスの著作を読めば一目瞭然である。現代社会はギリシャの哲人の恩恵を思いのほか多く受けているのである。

訳者の高田三郎氏は「この書はいわば哲学的な人間学の書であり、人間にとっての生活全般をその対象とする。特にしかし、人間の生活全般の最善なるものの何たるかを、その実現を目標としつつ、考察するものであるところに、それが実践哲学の書だとされる所以が存したのである」と要約している。

マルクスが資本論第1巻で引用したように、本書は政治経済学あるいは厚生経済学の基礎理論を与えるものとして読むこともできる。実際、第5巻では交換経済の基本的考え方、その仲介としての貨幣の役割が完璧に理解され、現代経済学に通じるレベルで語られている。

「大工は靴工から靴工の所産を獲得し、それに対する報償として自分は靴工に自分の所産を給付しなくてはならない。それゆえ、まず両者の所産の間に比例に即しての均等が与えられ、その上で取引の応報が行われることによって、いうところの事態は初めて実現されるであろう。もしそうでないならば、取引は均等的でなく、維持されもしない。・・・交易されるべき事物がすべて何らかの仕方で比較可能的たることを要する所以はそこにある。こうした目的のために貨幣は発生したのであって、それは或る意味においての仲介者となる。事実、貨幣は、あらゆるものを、したがって超過や不足をも計算する。」(第5巻第5章)

このように、アリストテレスの経済に関する慧眼には驚かされるが、本書のメッセージはそれに止まるものではない。本書の最大の貢献は、人間の学としての倫理学、政治学、経済学においては、類似的な具体的状況を経験的に積み重ね記録し、そこからできるかぎり普遍的な原理を帰納するという学問上の方法論を確立したことにある。これはソクラテスやプラトンにはなかった視点であり、現代の社会科学における実証主義の礎石となったのである。